

2008.6.19 広島市民病院

がん性疼痛の薬物治療

小網町ペインクリニック

藤本 真弓

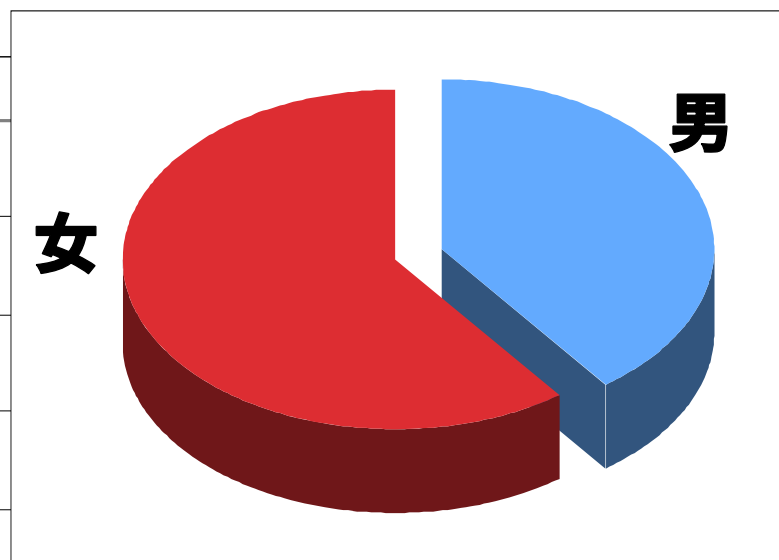
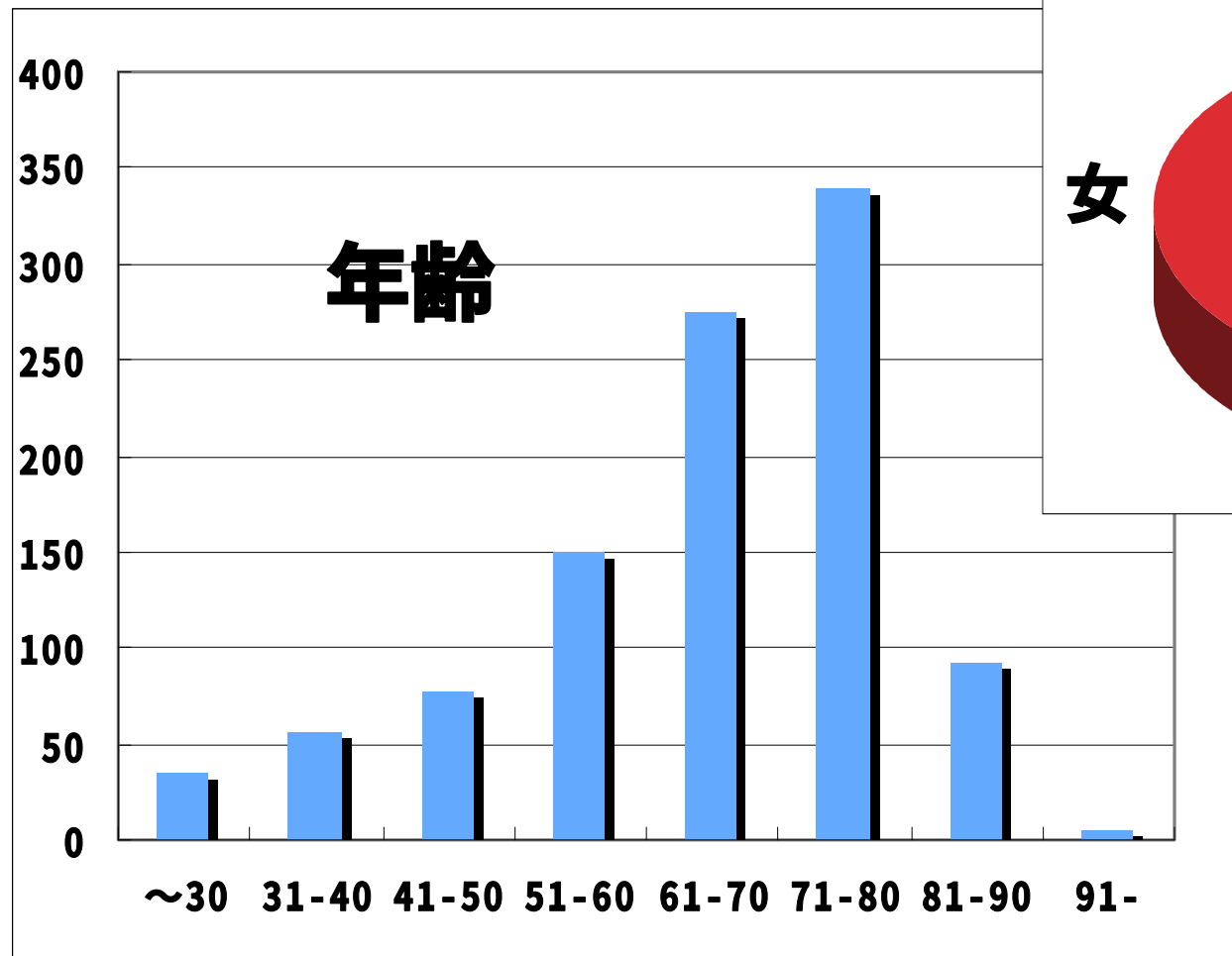
6月1日より名称変更

「小網町ペインクリニック」

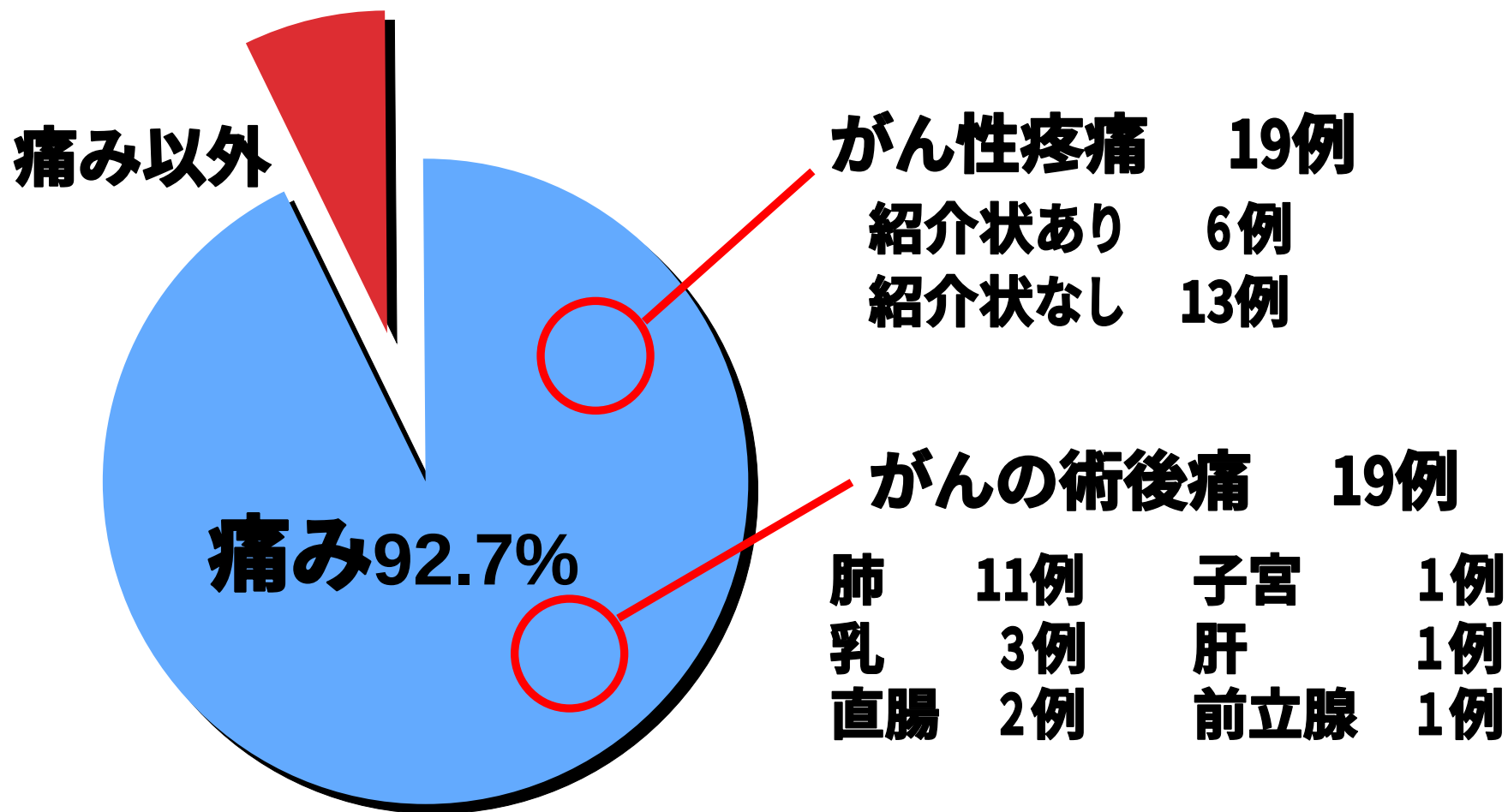
となりました

年齢・性別 (1018例)

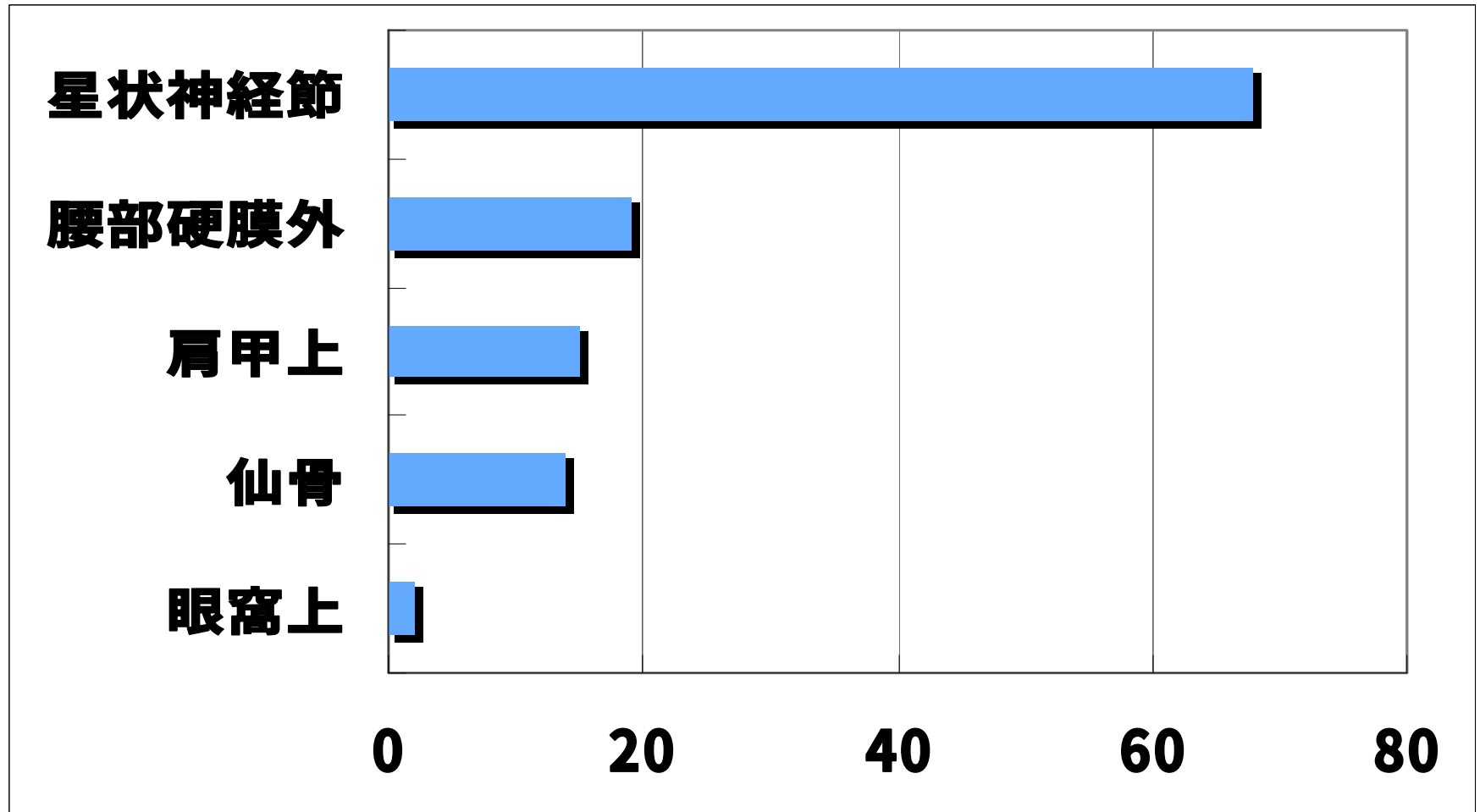
性別



受診理由



治療 -神経ブロック-



治 療

-薬剤-

(1) NSAIDs, アセトアミノフェン

ロキソニン、ハイペン、ロルカム、ポンタール、カロナール、コカール、
ロピオン

(2) オピオイド

リン酸コデイン、レペタン、モルヒネ、フェンタニル、オキシコドン、
レペタン

(3) 鎮痛補助薬

トリプタノール、ランドセン、ガバペン、テグレトール、メキシチール、
プロスタンディン、リドカイン

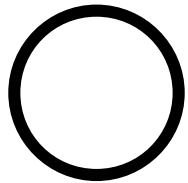
(4) ステロイド

デカドロン

良くあるパターン



「年のせいなので治りません。痛み止めを飲むしかありません」

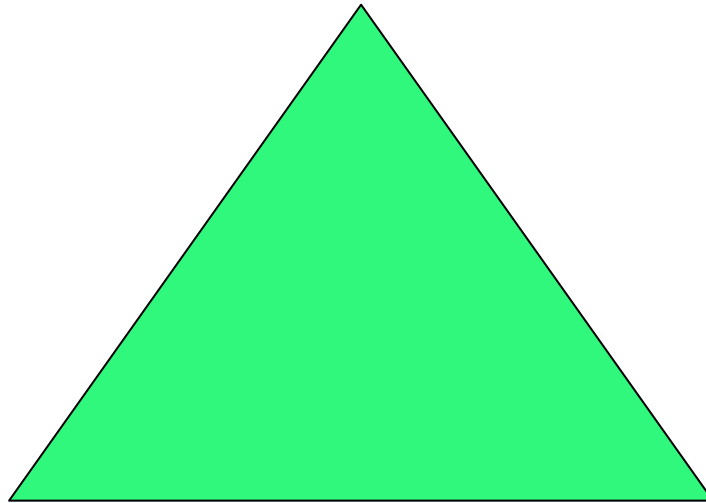


「あなたの今の状況に対しては、痛み止めを飲んで日常生活を過ごしやすくすることが最も良い方法です」

がん性疼痛に対する 薬物治療

痛みの評価

原因



種類

強さ

がん患者の痛みの原因

- 1) がんそのものによるもの**
- 2) がん治療によるもの**
- 3) 全身衰弱によるもの**
- 4) がんに関係ないもの**

痛みの強さの評価 (10割法)

- **痛みのない状態を0, 最強の痛みを10割
とすると、現在の痛みは何割か？**
- • face scaleが手元になくてもできる
- • ”割”という表現は、高齢者にも理解しやすい
- • VASと違って連続性がない

がんの痛みの種類

1. 侵害受容性nociceptic

障害部位＝痛み

がんが多い、モルヒネが効く

2. 神経障害性neuropathic

神経組織の損傷→支配領域の痛み、
鎮痛補助薬が必要

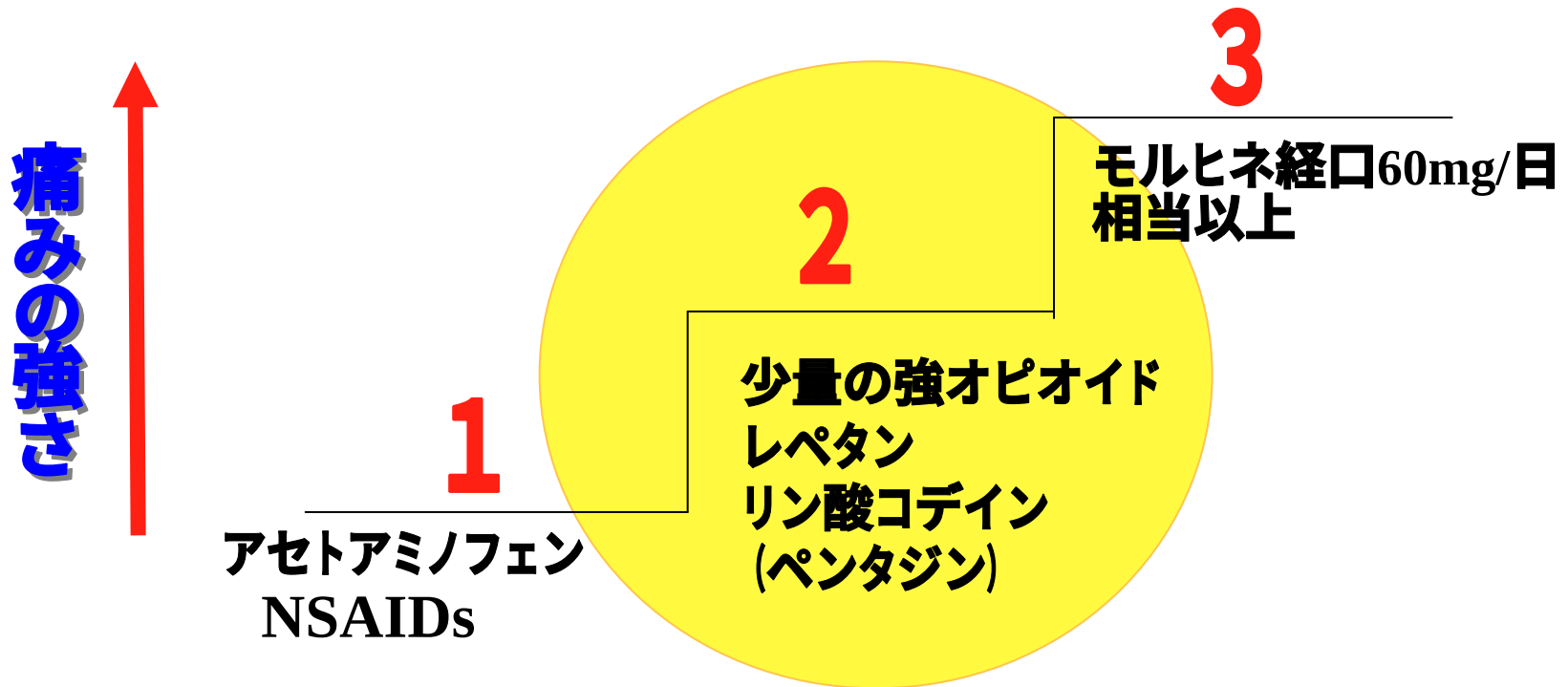
3. 上記の混在するもの

現実的な分類！？

- 1) 鎮痛剤が効く痛み
- 2) 鎮痛剤の効かない痛み

鎮痛剤を投与し、その反応で評価

WHOの除痛ラダー



- 予後ではなく痛みの強さで薬剤を選択
- 癌性疼痛の9割以上は薬剤で解決

第2段階で用いるオピオイド

	お薦め度	麻薬処方	便秘	嘔気	味	その他
リン酸コデイン	○	×	●	▲	×	12g/日まで
レペタン坐0.2	△	×	●	●		1.2mg/日まで
オプソ5	○	●	●	●	○	上限なし
フェンタニル注	×	●	±	±		上限なし
オキシコンチン5	○	●	●	±		上限なし

オピオイド開始の実際

(1) 麻薬処方箋が出せないとき

- ・リン酸コデイン (1%)、6g 3×または8g 4×
で開始、便秘に注意！！

(2) 麻薬処方ができるとき

- ・オキシコンチン(5) 2T 2×

(3) 激痛、すぐにどうにかしたいとき

- ・オプソ(5)、痛みが半分になるまで
1時間ごとの反復投与

モルヒネの特徴

(モルヒネはオピオイドの基本)

- 投与量に限界がない**
- 効果に限界ceiling effectがない**
- 副作用とその対策がよく知られている**
- 投与経路が選択できる**
- **μ receptor作動性の強オピオイドである**
- 身体依存はあるが、痛みの存在下では精神依存は起こらない**
- 有効血中濃度の範囲内では呼吸抑制は起こらない**
- 肝代謝、腎排泄だが共に毒性はない**

モルヒネの副作用

- 便秘
- 嘔気・嘔吐
- 眠気

口渇、発汗、ミオクローヌス、せん妄、
排尿障害、掻痒・・

オピオイドの一般的な使い方

- 徐放剤＋速効剤（レスキュー）
- 副作用対策のための薬剤
- 増量は3～5割増で
- NSAIDsを併用するとよい
- モルヒネが効かない部分には、鎮痛補助薬を併用する

オピオイド製剤一覧

	モルヒネ	フェンタニル	オキシコドン
徐放 (定期)	MSコンチン カディアン モルペス ほか アンペック パシーフ	デュロテップ	オキシコンチン
速効 (定期／ レスキュー)	モルヒネ末 (散) オプソ 塩酸モルヒネ	×	オキノーム パビナール

鎮痛剤に反応しないときは どう考えるか？

- 1) 効力 (投与量) の不足**
- 2) 疼痛機序が鎮痛機序と違う**

具体的な対策

「鎮痛剤を増量するか、レスキューを用いる」



(軽減あり)



増量！



(軽減なし)



(眠気なし)



増量！



(眠気あり)



他剤併用！

推薦図書

トワイクロス先生の
がん患者の
症状マネジメント

監訳
武田文和
医学書院